

愛を説いて、秘密を告げて、さて、「何故の理想ぞ」と  
 問ふならば、已が行くべき生命の野、神のさの、み園  
 を指して、徐ろに、唯もうなつかしい、唯もう、なつ  
 かしい……と、  
 かくて、一年、又春秋、二つと共に野に老ひて、若木  
 の花は、散つて行く、五十の生涯！  
 いろんな感想を考へて、胸を抱いた、手をとつて、つ  
 と、起ちあがると、烟るやうな野の遠近、淋しい、夕  
 べの氣が色が、悠久と追つて来る、

袂から、とりだして、吹きてた、一管の牧笛、  
 余韻が嫋々野面に播はつて、二つはこゝへど、集つて  
 来た、冷たい、夕べの露をふんで、眠げな花の香に醒  
 めて、小川を渡つて、丘を超へて、歸つて行く、夕べ  
 の徑……  
 春の夜の月は朧

(松原)

『春さー』

斯う呼び止めたは、毎朝通つて行く松原の、たふれ

るような小舎の、婆さんで、何時交じつたか、萎れた  
鞆もこぼれて見ゆる、一束の櫛を、朝寒の爐に、くべ  
ながら、なんだか、そわくしたような、ぶり、

「春さ、好いで、ねはかよ、あら、寸時れ前に、話し  
てい、事があるんだ……」

「お婆さん、いつも精が出るのね、」

ど、私は、二つを連れたま、投げるように、柴戸を  
くいつた、

「若いに早い痛、感心なア」

如何にも、うれしうに、にあくして居る、

「私しや、お婆さん、永久もあうして、……」

はつと、思つて、口を噤んだが、お婆さんの耳には、  
たしかに聞えあかつた、

「ね前さ、まあ、いつ迄も、そんな職して居る、存念  
だかのう、當世皆無、堅氣お娘だいなア、他人事じや  
ねえや、俺りやあ、おんだか、口惜しい、ような氣が  
して、なんねい、だが、春さ……お前、まあ、俺お  
とつくら胸ん中を、話して、くんねえかよ、」

『.....』

やがて婆さんは消ゆかゝつた、楷火を續ぎながら、なほも熱心な言葉をついける、

『春さ、知つてるだあよ、彼の松吉さあ所のね里つ子のう、なんでも、東京の高貴な紳士に、のぞまれたとかで、朝早、此前を、婦夫で、通らつしやつたんだがよう、聞きやア、富豪の、奥さんとかに、なるんだとかよ、』

と、老の腕に、力をこめるのであつた、

『それに、彼の、ね里さあだよ、なんでも、世の中ア黄金だあ、金さへ、呉れりやア、何業でもするつて、いつてたさが、とう／＼身体あ、三百兩に賣れたアだよ、ほんに、女は花だよあ.....』

云ひながら、妾の姿を、熟々見入つたが、ふつと、思ひだしたように、

『そりやあ、ね前のようなあ、都にも、たんど、あるめいだよ、精神次第だ何所へでも嫁かれる、ね前の姿容だのう、さう云やあ、ね前、笑ふだかも、知んね

わが、息子、花作があたよ、如何でも、ね前を、欲し  
いと云から、とんでもねへ、あんな美娘を……と、  
云つてやつたあたよ、すると、世の中あ、不如意とか  
此頃アもう、山へも、行くか、行かねたよ、』  
思はず、老の眼にホロリと、した、

(かへり路)

朝、夕の、露を踏んで、眠げな花の香に酔ふて、小川  
を渡つて、丘を超へて、歸つて行く夕べの野路！  
ふと、彼方に、俛首て行く、花作の影が見へる、

あゝ、あの太古に似た深林の中に、獨り、静寂を想ひ  
にかへつて、清らな、斧を、打振る時、奈何してそん  
な、心が、起るのでせう？  
力なき鞭をあげて、睦じげに、ならんで行く、夫婦の  
小羊を、夕べの路へと、追ふのである。(完)



姉のおしろ

『俊さん、姉さんの胸中を……』

行く秋の寂寥を、此野、一所にかき集めたかと、  
うら枯れた千草がくれに、鳴き細つた、虫の聲を、ふ  
みながら、山陰に淡る、落障を追ふて、とぼくと迎  
る、夕野の路、悼氣な、戀にやつれた、お胸を押へて  
おもはずも姉さんは、はらくとなされた、

『あら、姉さん、妻よく、存じてますわ、』

『そうね、妻の心を察して下さるのは、俊さん一人

ばかりよ、例ひ、死んでも、俊さん、

『姉さん、そんな心細い言を……』

と、仰ぐ、瘦せくし、姉の面わ、胸は千々に、か  
むしらるゝ、

『何も、好んで、出郷と云ふのじゃ、ないけど、俊さ  
ん、妾もう、堪えきれませんから、』

糸と細く、絶たれと思ふと、葬ばかり、妾の手を握  
つて、

『俊さん、姉さんはね、獨立してよ、異郷で、しづか

に、獨立しますわ、』

『何を、仰しやるの……、姉さん、潔さんの變心だ  
つて、唯一時よ、』

「否、捨てられた身の、それを、復びどり、要求ませ  
んのよ、却つて、其女と潔さんとの、お睦じい、御様  
子を、妾が此土で、お羨み申して、居るなんか、お互  
に罪なのよ、ほんど、もう、堪えられなくつて、……』  
力もなく、

『妾の楽しい夢は、其女も楽しい夢、悲しい、感は、

其女も悲しい、想、ですから、唯もう、ね兩人の行末を、祈つて居ますわ、何卒、俊さんからもねへ、ね兩人の、御消息を、時々ねね、願ひますよ、』

『.....』

『浅間しい姉さんでしたねえ、俊さん、堪忍して』

昔ながらの、やさしい手に、妾の亂れ毛を、うつと、かきあげて下さる、

『俊さん、聖戀だなんて、妾が好い、鏡よ、能く、心を固定で、何事もねへ、お頼みしますよ、』

戀に、はぐれて、漂零た、哀れな、一人の、我が姉が其苦しみを癒すべく、異郷に行くを見送つて、あかす秋の夜道を語り合つたが、いつかもう、路は盡きて、暗に反白う、渡場の旗が、

x x x x x x x

『俊さん、此別が.....ちよいと、ね手を』

「さよならく、丈夫でね、.....」

水は流れて、影は消えて、幽かに、すしり泣く、聲が聞える、

「妾の、心、姉さん、どうぞ、許して、」  
よろ／＼と倒れると、風なきに、汀の葦の花、をびた  
しく、ちるの (完)

後半生

引例へば、花も草も、荒野の末に、美しい愛人ど、分  
袖れても行くような、寂寥しい、然矣大寂寞しい、秋  
日の風物！無力げな落日の影が、急乎淡紅く、小椽の障  
子に、一日の最終の、光線を投げると、突如立ちあが  
つて、見るともなく、空を仰いで、尙も、文士は、沈  
痛に言葉を、連続られたの  
「如斯な理由で、人生の罪の最極を盡した拙者、今  
ね話した其事が、不圖も私を新生面に誘導くの、動



機となつて、吁、恐ろしき悪魔の現化と、自覺ると  
幾夜の夢に、苦しんだ事がありましたか、  
と俯だれた眉宇のあたりには、愁はしき、血汐の浪が  
反見ゆる。

「全然眞平、拙者は、秋水ならぬ一枝の筆に仇敵な  
らぬ、有情の人間を、痛傷なく、柔らかに屠つたの  
で、其美しい、犠牲となつた青春の男女！  
其希望ある形骸を捕へて、再び浮ぶなき、深瀬の底  
に葬つては、ひとり、三面の記事に、嫣然として居

た私の罪！實に奈何たる、最大きい罪惡でせう、で  
すから、拙者は、貴女の如な、世馴れぬ、可愛い！、  
少女の爲、否、誰もですが、限りもない、高い理想  
の階段に、攀登つて、半途に停止んだ人等の訓誠と  
して、必らず自分の今日迄に於ける、蹉跎の歴史を  
繰返すので、決して、頼もしい其青雲志の程を許容  
ぬのでは、ありませぬぞ、」

夕風烈しう、文士は襟を正された。

「三年、五年、今後、貴女が東都に苦學して、一意

成功の終途に急がれようとも、婦人の身の果して能く、此社會の誘惑に、打勝つ事が出来るでせうか？  
令例、研學幾年の功が成つて、君が目的の婦人新聞記者！榮光ある、王冠を手にしたとて、  
恐ろしき前途の職業！

可憐むべき他人の、秘密を摘發する、.....  
あゝ、それを貴女は胸底に反省ませんか、「天地に生れて、自由に生きて、罪業なく墳墓に、進行で行く、」全く人生の意義は、盡くされて、居るので、何

を苦しんでか、淺間しい、虚名の前に、自ら知らざる罪を犯さうとするのです、パンを求むる計畫は、他にいくらも有るの」

「何卒、もう、了解りましたから.....」

「是非、お歸郷なさい、秋高き、信山の幽境に、大自然の啓示を聞く、貴女の運命を、拙者は、羨望に堪えんのです、實に、渴仰して止まないのです」  
縷の如き文士の追想!! 沈み行く日に得堪えぬよう

x  
x  
x  
x  
x  
x  
x

秋霜、烈日、

例ひ一大鐵籠を下したとて、容易く碎けようぞもしなかつた私の理想の熱塊も、血有り、涙ある、文士が眞情に、潤然と溶けいて、再び、都門の初秋に、背き去つた爾來、

樂境に樂快しい夢を重ねて、今年の秋も既に開けた、今宵天空に北碧星の煌き！

あゝ、當年の旅舎の窓に、光は彼文士が記憶を引き出して、貴下が救済の女の現境を、思ひ浮べて下さるで

あろうか？

成功もなければ失望もない行末は平垣な人生の行路！斯くして私の後半生は、何事も面白く、何事も快樂し

ん  
(完)



辭郷の賦

よし子

「寂、花影に唯泣いて  
 唯に老ゆる」と春の夜を  
 灯に伏しぬ若人が  
 慰籍もなき漂零に  
 たゆたひがちに姉と呼ぶ  
 あゝくやさし胸なれば  
 力なき手に縫がらせて  
 詩弟と呼ぶに何んの罪科

竹の葉婆娑と地に落ちて  
 土を打つ音の悲しきに  
 若し夫れ涙幾條の  
 頬を傳ひて膝に泌む  
 美しくし人の在らばわが  
 妹よ、友よ、戀はましも  
 あまりに若き花やぎや  
 詩興説く女の世にあらぬの

異性あればぞつと退けて  
 泪もつ眼に願望され  
 とと云へ冷た世は人は？  
 見づや火影の頬のやつれ  
 あゝ、なほ斯くて間裂いて  
 形なき太刀に血ぬらして  
 若き形骸を屠りたる  
 小狭き地の胸襟なりやの

涙の人を友と云ふ  
 裸形の女世と容れず  
 山紫の信をいで  
 南五十里、京に入る  
 忿怒よ、寂寥よ、悲哀よ、  
 たとへば斧を掲げて  
 狂女緒琴に立ちしごと  
 十三絃を横に断つ

女詩人

(一)

「あら、小枝さん、久濶ねね、  
 能く、まわ、こん  
 な僻村へ……」  
 と、暖い春の光を、全身に沿ひて、今迄、前栽の若菜  
 を培つて居た優しい婦人は、其汚れた、泥土の手を、  
 一寸傍の水溜で洗つて、立ちあがつたが、如何にも愕  
 ろひたと云ふように、此方を見て、莞爾と笑ひながら  
 「本當に久らくねへ……、然而、どうぞ」

少し許り摘みとつた、青菜を、籠のまゝ小脇に抱へて  
悠然に、一室の方へたち去つた、

油氣の無い、黒い髪を、小さな、伊太利巻にして、身  
には、見るから、質素な微塵縞の扮装！、不麗な人の  
後影.....

あり、是が十年既往、美しい、友禪姿に、小さな胸を  
聳やかして『世是榮華』を唱へた、我友、

山川春江嬢の、現在の場遇であらうかと、云ひ知らぬ  
感想に打たれて、熟々と、見送つたが「まあ、神様の

如な」と、思はず胸裡の底から、起つた、美妙的叫び  
は、幽かに自分の口唇から洩れた、

開村の白晝は静かに、雞が鳴いて、簷端の白梅が三つ  
ばかり、こぼれた、

(二)

眞乎、もう、十年になりましたのね、左様、丁度、學  
校時代でござんしたか、私は實に甘いく蜜の如な戀  
の力に酔はされた事がござんした、花と飾りたつた、  
身体の嬌態には、學校の往來に迄も、異性の人の、や

さして、一瞥を求めて、  
 もう何事も、世の中は、戀でなくちやならぬ、愛でな  
 くちやならぬと、言辭、行爲、まるで、戀愛で、持ち  
 きつたよう、起思彼の時でござんしたわ、  
 皆さんが、小町娘、小町娘つて、呼んでくださたのわ  
 ……、楚歌裡に教育された、私の心は、日一日と、  
 戀の、一道に許り、傾注けて終つて、罵詈の反動は、  
 尙も私の情火を煽つて、實、淺間しい、邪界に沈んで  
 行くのでござんした、

間もなく私は學校を退學たのを幸ひ、かつて、燃ゆる  
 ような、青春い、想を互ふ、未來は必らずと迄、契り  
 合つた、竹川と云ふ法學生に、如何でござんせう、決  
 然、妾の手から、結婚狀を送つたのでござんすの…  
 すると、程なく、濃紫の莖をちらした、美しい、其人  
 の手紙が届いて、記事には、  
 「自分は今迄も、戀は絶對であるなど、云つた事は  
 少なからぬ誤謬であつた、」  
 と、懺悔らしいような、返書、けれ共、貴女、當時の



妾の精神！如何して、あんな事に、執着し、  
自分の戀の實体まで、竹川の爲に、犠牲に供する事が  
出来ませう、舊の戀人は、現の路上の人、既う何等の  
關係もあるまいと、溶かすような、妾の嬌姿の技倆は  
竹川の友の、石山と云ふ學生に尋常あらぬ、秋波の悉  
皆を送つたのでござんした、  
戀に餓えた、若者の心の裡は、思はぬ、獲物でも、打  
捕つた、ような、ふう、朋友の前、社會の前、優しい  
友を得たのを喜んで、表面は誠に、美しい、交際を結

んで居りましたが、妾の丁度、二十一の春でござんした  
染々やさしかつた、石山は、流行の女優花治と云ふ者  
と、遠く、奥州へ、同道に、逃亡たと云ふ噂……  
丁度、空氣の波動のように、口から耳へと、漸次擴が  
つて、私の胸にまで、響いた時、!! 私は双の袖を噛ん  
だまゝ、身も世も忘れて、悲しんだのでござんした、  
美しいと思つた、戀の實際に、ふれて、無慘、男子の  
玩弄物とあつた、妾の、今此のような悔は、もうく  
遅ひので、少しも悔ゆるの効驗がございませぬ、

此のような間にも、保護とたのんだ、両親の、浅間しい妻の墮落に、いろ／＼、心を痛ました、結果でもござんしたか、七日違ひに、死亡られて、終つた、後は誰一人、憫然な孤子に、温い同情の泪を、注いでくれるものも、ないくらい、寧ろ、同音に浮氣娘の因果の程は、如彼したものと、まで、擯斥きされたのでござんした、

嗟、私は、此の時でござんす、誠、男子の戀の觀念は唯、瞬間の幻影のようなもので、決して、捕ふべく、

趁ふべきものでないと、云ふおとを、感じると、同時に、自分の生涯は、全く、華やかな、人生の虚榮心から、脱れて、幽玄を、詩想の索求に、あらゆるものを捧げ盡くして、寂寞た私の、後半生を、飾らふ、と、思ひ、いつてからは、何んだか、此郷の、ほど／＼、厭はしいよう、矢のやうな、心の一筋は、只一人、昔の女友の住へるを頼つて、心細い、女の身の遠々、信濃の征途に上つたのでござんすの、短亭長驛、一心をき、瀛車の進行は、いよく、不運な、此身を、目的

の土地に運びまして、妾は、直ぐ、依頼とする、其友の住宅を、訪ねましたところ、浮世は、まさると、常無きもの、.....親友はもう、此土には居りません、遠く、芭蕉の葉繁る、臺灣へと、良人と共に轉任れたそうでございます、あゝ、妾は、湧き返る、泪の萬解を、如何に、破れ果てた、旅の衣に、絞つたてござんせうー後事を.....妾は、是を、誇的に話しするを好みません、

呀、世の中に、不孝の子、失戀の女、失敗の人は、やがては、大悟の妾でござんした。

(三)

一個月許り以前、誰も、味はふ、高い理想の、蹉跌に、苦悶んで、信濃なる、叔母の、閑居に、寄宿つた自分の、ゆくりなくも、今日、散策の序に、むかしの親友の、庵を叩いて、耳にした、悲惨の物語!!、果敢ない、運命の定律に、觸れて、楽しみ多い、花やかな、半生を、涙のふちに、落し入れた、薄倖な人間

は、一人此世に、此友許りではない。  
 女と云ふ女!? 自分は、斯う云つて、憚からぬ、  
 現に、此身が、其苦しみを、味はつて、居るのだが、  
 友が潔い、改悛の言葉に、燦然! 心の底には、訓誡の  
 光が、ほのめくのである、  
 汚れた、多くの感想の中から、永久に、活た罪人は、  
 静かに、人生の森羅を、ほく笑んで、遂には、此峻嚴  
 な、詩境の土に花のような、其形骸を、横たへること  
 であろう、

嗟、ア、我友山川春江子は、無名の女詩人である、  
 夕暮、自分は再會を期して、門を辭した、  
 月は朧に、淡く人影を土に印象んで、泌み入るような  
 白梅の暗香が、斷續、後方から追つてくる。(完)

文  
箱

都門の夏、いたづらに長うして、今や、人叫び、人悶  
え、草萎れ、水涸るゝの時、こゝ、信山のあけくれ、  
蝶あらず、黄鳥あらず、暮鐘に亂るゝ、花はなきも、  
隈なく刷かれし空蒼の彩、觸れなば、散らん白露をこ  
めて、それか、自然の大舞台なる、木の下影に、風柔  
らかう、人の子の、衣袖を流れて、胸より乳房に乳よ  
り、骨に、キト、泌み入りて、まあと、涼氣に、酔ゆる  
の心地！ 許し給へ、我は、異郷の風光に厭きて、擧

げて、信士の夏を讃ふるもの、禪を思ひ、詩を語るの  
時ならざるも、見ずや、裂々燃ゆる、萬有の現象は、  
能く、情熱の發現を啓示して、それよ云ふなき、小  
き戀を語るの今、

左なり、かくして信山の夏、夢のごと、あはたし、  
やがては、来る、秋落葉の、天地を豫想して、九旬の  
綠陰を束の間のライファー！

都門の夏、徒らに長きを侘びて、尙も炎熱に、狂へる  
の人、來らずや、來りて、仙境に、小なき戀愛を、語

るを、願はずや

と、思ふ、頃日をたま、く、詩兄、白波子の父君、

はからずも病みて、息子が歸省を、促すべく、書を、

君が許お送りしと聞く、

相見ざる、茲に一年有半、我は歸らせ給ふ、其人の其

係を、うつゝに描きて、怪しき幻を追ふ事數日！

歸りましぬ、歸りましぬ、かつて、仰ぎし、優しの影

は、瞭として、我前に立てるにあらずや、神々しき眼

鏡の光に、我は、君が人生の春秋、多きを偲びまつ

るを、俯し給ひし、其眸よ、さても、變りし、我姿に  
 愕ろきて、瘦せくし肩のあたり、つまみし肩上げの  
 糸なしと、乞ふらくは、其み心に、問ひ給ふ莫れ、  
 それよ、彼の時よりは、我又、人生の春二つを、重ね  
 しの女、情に於て、智に於て、將、体に於て、いさゝ  
 か、向上の、傾向を覚えしなるを、女十六、ひたぶる  
 に、男の子恐ろしと思ひし身此、今こゝに、君を仰ぎ  
 て、語なきの人、唯に血汐めぐる、塑像ならざりしか  
 を疑ふ、

況してや、まぢくし父君が笑顔よ、我は多く、此間  
 の、消息を、語らずと雖も、誰か、多年漂浪の、遊子  
 を抱ひて、刹那、浮び來る記憶の徑路に、涙滂沱たら  
 ざるものあらんや、  
 君、病床に、侍し給ひしより、父君の病は、あやしき  
 迄に癒えて、「斯くては、汝に用なかりしものを」と宣  
 ふ、君や、まこと、編輯局裡、ペンを生命の身、さら  
 ば、明後日は、狂げて歸京せんと云ふ  
 突如來り、忽として去る、分袖の情、轉た、堪わがた

くて、黄昏、共に俱に、東北のパークに語るの  
 巨塔の如きアークライトの下、君は俯しては、曲江の  
 流を望み、仰いで、宇宙の、無窮に、大息して、再又  
 三、あかしき、實在の人生を嘲笑し給ふ、  
 あゝ君、青春の血、燃ゆらん如き、胸にして、何ぞ、  
 しかく、現實に、嫌厭して、「戀はなき身」と宣ふもの  
 ぞ、知らず、君や、半生の悲劇に、泣哭して、來るべ  
 き、光明の前半生を、尙も、トライシ一の渦中に、葬  
 り去らんとするか？

青葉、若葉、幽香ひとり、暗に浮動志て、静かに、や  
 はく、四袖を拂ふ、君は云ふ、「春爛熳の花に笑まへよ  
 り、我はむしろ、蕭々秋雨の悲哀に泣かん」と、詩人  
 なる哉、君又、輕浮、喧噪、騒奮、の春より、逃がれ  
 て、秋蕭殺の冷氣に、咽ばんとするもの、推して知る  
 花より、月を、紅より、白を、明より暗を、樂より哀  
 を、尙も、哲學を思ひ、宗教を想ふの人、詩人と云は  
 づして、何ぞや、  
 我や、君が詩情を學ぶなきも、そも又、興趣を、同じ



うするの子、いさゝか、ボエチカルの分子を含まと云  
 はんか、呵々として、口を掩ふ、  
 談や漸く佳境に入りて、彼を叫び、是を語るたま〜  
 現代の、文士、騷客に及ぶや、君又、無名の人士を、  
 思ふと、  
 あゝ、いづくんぞ、我が意に投ずるの甚しき、君が  
 心即ち、我胸！我が、情緒、是、君が理想！  
 我も無名のすべてを慕ふと、相顧みて、啞然、『無名』  
 如何に、韻のやさしきかよ、

小、弱、薄、遜！是等の幾字は、見づや、無名の裡  
 に含まれつ、名利なく、權勢なく、榮達なく、成功あ  
 き、是等の幾名詞は、之れや、無名に、伴ふ、やさし  
 き聯想のそれとして、吾人の胸裡に、湧出せる、可愛  
 低音のひびきにあらずや、再び相かへり見て、撫然、  
 狂風一陣、君が杖を斜にかすめて、妾が花月の髪を  
 拂ふの時、善光寺の鐘聲、まさに、十杵、歸途に就く  
 江南、六十里！人行いて今やなし、  
 夢中の夢たりし三日の清興、あゝ、何れの日か、これを

ば過去の物語として、それよ、南洋の橄欖の影に手を  
携へて、笑談するものぞ、山は人面に従ふて起り、雲  
の、馬頭に傍て生ず、信山の大概に對して、君夫れ、  
何等の感想ありしや、我は此境に君と相見て、然り大  
なる詩を語りしのみ、

君よ、東綿嶺を出づれば、古人あきを愁ふる勿れ、萍  
水相逢ふ、是悉く、他郷の客、相擁し、相救け、以  
て、幸に、健在なれ、

x  
x x  
x x  
x x  
x x  
x x

糸と細い、春雨は、今、烟るように軒を過ぎた、泣い  
て、泣き盡くした、今日、終日――

或る悲しい、追憶の影にあやつられて、ふと、文箱か  
ら、とりいだした、此玉章、否、彼女が、草稿……  
自分が、かつて、京橋の或る社に奉職して、殆んど、  
人生の、奮闘的生活を、續けて、居つた頃、急に故郷  
の父が、病氣との報知に、倉皇、其土に、走せ參んじ  
た、あゝ其折……

自分は、彼女妙さんと、一夜城山の公園に行いて、相

たづさへて、人生を語つて見た、  
 落泊の僕、希望有る妙さん、浮世を迎る一筋道は、か  
 くして、二人をいづれの、懸隔に終らしめるのである  
 う、と、無限の哀感に打たれた夕べ、  
 往昔は夢だ、今妙さんは、遠く、南米のミシシピ一の  
 河畔、紫匂ふ、十里の葡萄園！  
 其葡萄園の女園守..... (完)

駒の蹄

(上)

掩ひ重あつた、韓山の風雲は、一時に砲劍の響と變つ  
 て、引きもきらぬ、號外の呼聲、黄帽の往來、太平の  
 夢は、茲に、破れて世は、一瞬に、凄じい混沌の巻と  
 化した、此影響は、ひいて、此所、小村にまでも、及  
 んで、朝夕、聞けた、太吾作が眠けな節も、ハタと、  
 止めば、今日は、嚴めしい、軍服に、鍬を劔に代へて  
 起つと云ふ有様、いやはや、這回の事は、殆んど、

名状すべきでないの今朝も、此村の十余の兵士は、急に、召集令状に接して、倉皇、立發と云ふので、停車場はもう、未明中からの、大混雜、自分も、親しい、友達が、此群に、加はつて、同じく立つと云ふおとを聞いて、其行を送るべく、プラットホームへ立つた。群集の中には、親もあろう、子もあろう、妻もあろう、友もあろう、各自、勇士が譽ある今日の門出を勵まそうとして、歡呼の聲に、待ちかまへて、居るが、年老つた、婆さんなどは、是が、生別

死別の際かのように、盡きぬ涙を、たれて居る、何しろ、双肩、相磨すると云ふ、有様で、構内は丁度湯釜の煮へ返へるよう、自分は到底、得堪へられぬので、人浪を、押し分け、押し分け、待合の方へ行かうとして、ふつと、傍の椅子を見ると、其所に悄然、俯だれた女がある、見馴れた、姿と、熟く見ると、愕矣、而かもそれは、隣家の、ね瀧つ子なので、いつ、又、斯んな、所に、來たのであろうと、自分は心ひそかに、此場の無事を祈つた、

折から、一隊、來着と云ふので、並んだ群集は、又一時にどよめいて、襟を正すもの、帽を脱るもの、衣摺の音、下駄の音！

再び、すさまじい、活劇と、演出されて、各自、今かど、其乗車を待つて居る、余り、來着の速いので、自分分は、そつと、懷中時計を取りだして見た、

すると、發車には、未だ一時間もある、ねかしいと思つて、一人、悠々と、構はこんで居ると、果して、夫れは、突飛な虚報であつたので、一同の哄笑は、暫し

場内を撼がして止まあかつたが、此間に、自分は遂にお濱つ子の姿を、見失なつて終つた、

忽然！ヒッ！と、けだましい、ものゝ叫聲……、續ひて起る、人の罵言、ハツと思つて、其方へ走つたが、見ると、哀れ、夫れは可哀のお濱つ子の

今日、此、壯行を送らうとして、乗り捨てあつた、他人の馬を、ひそかに、自分の家へ、引いて行かうとするのを、警官は、一手に、彼女が鬘莖を握つて、荒々しい、尋問に及んで居るのである、併し一向、要領を

得ぬので、傍の自分は、知己として、同伴すべく、命  
ぜられて、向ふの派出所へ行つた、  
お濱つ子は、一人何事か黙頭ては、時々、悲鳴の聲を  
あげて居る、立ち會つた、三四人の警官は、詳細に應  
答を促したので、自分は涙を振つて、語り出した。

(中)

彼女は今年、廿歳であるが、想ひ合ふた、夫新造が、  
去年、入營中、下志津大演習のあつた時、誤つて、落  
馬したが、一夜のうちに、恐るべき、肋膜炎とまで、

變症つて、直ぐ、東京の衛戍病院へと、入院たので、  
當時、彼女は、此悲しい、報告に、夢かと、許り、を  
どろいたが、せめて、自分の手から、水なりとも一杯  
と、殊勝にも、婦人の身として、其看護の任に赴いた  
のである、彼女が、着いてから僅か三日、思はぬ逢瀬  
を喜んだが、其儘……かつて、伏しなれた、彼女が  
膝を枕に……  
刹那！女の血は狂つた、馬は、それより、彼女が胸に  
わすれぬ、怨恨の塊となつたので、寝ても、醒めても

夫の仇敵、其唇にのぼらぬ折としては、なかつたが、  
現在も其儘、不治の狂女と、なつて終まつたので、  
語り終つて、思はず、暗然とした、室は、しばし、寂  
平と聲もない、

警官は、この犯罪の、狂人の所爲に出でたのを、うな  
づいて、やさしく、免赦を命じたが、尙、狂人を保護  
歸宅すべく、再び自分は、重い責任を依托された、  
自分は、今し、沈思に返つた、お濱つ子の傍に、懇々  
と歸宅をすゝめたが、暫時此儘に置いてくれ、と、ひ

たすらに、請ふので、詮方がない、其手をとつて、室  
外へと出た、

發車は僅、五分に迫まつたと、云ふので、四方は以前  
に倍しての、喧噪しさ、自分は、妨害に、ならぬよう  
にと、わざと、路の、端へ立つた、見れば自分は、此  
娘の腕を、満身の力で握つて居る、  
程なく、今迄の、あらゆる、響が、止んだと思ふと、  
遠く、遠く、五六騎の、馬蹄のひゞきが憂々と聞へて  
來た、自分は、此際、一層の注意を加へてゐんだ、

「貴郎、少し此腕を、はなして、下さい」  
訴へるように、自分を仰いで、涙ぐんだ、  
腕は紫色に染んで居る、自分の、知らず、一回に其所  
をゆるめた、  
と、思ふと、急に、其手を振り切つて、ばたくと、  
一算に、駆け出したが、影はもう、人中に消えて、見  
えなくなつた。すると「あの畜生……」  
續いて、キヤツと、帛を裂く、女の叫聲！  
自分は挫と、其所に倒れた、

あゝ、彼女の一念は、馬蹄のひらきに、又、むらく  
と、胸を掩ふて、今驅けて來た、軍馬の前に、立ちふ  
さがつたのであるが、馬は用捨なく、乙女が乳房のあ  
たりを、八つ裂にして、悠々と、勇士を騎せて、停車  
場へと着いた、  
身は夫と同じく、馬蹄に斃れ、靈魂は同じく、天國に  
召された、彼女が死屍、  
明治二十七年六月九日、  
吾には忘れぬ追憶の日となつて、終まつた、



十年の往昔ひかしに返かへつて、自分じぶんはすいろ、當時そのときの光景くわんけいを思おも  
 ひ浮うかべると、表おもてを通とほる、荷駄馬にたばの聲こゑにも、  
 彼女かれが臨終いまいの悲鳴ひめいは伴ともなはれて、冷汗れいかんの背せに満みつるのを  
 ねぼゆるのである

(完)

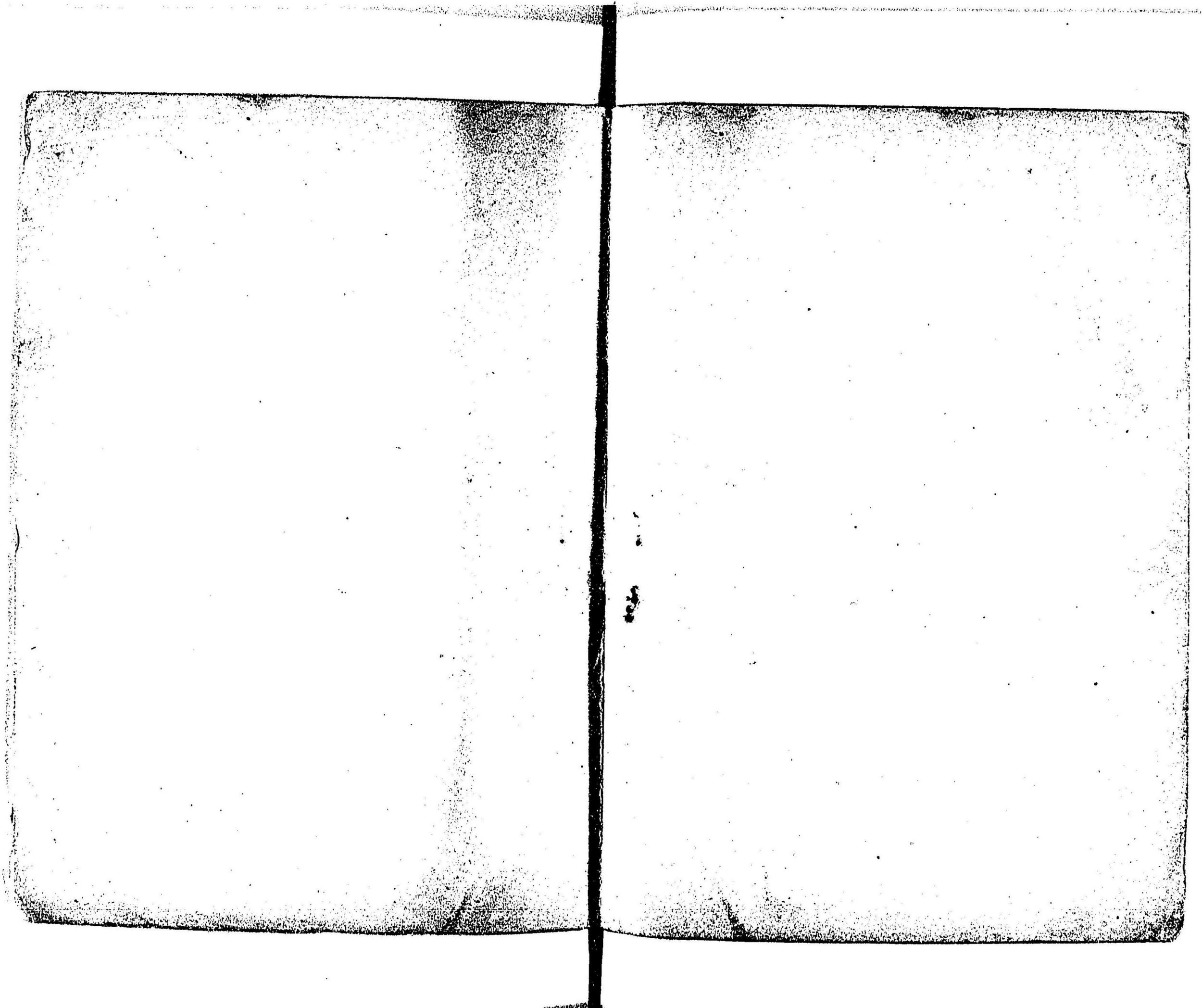
明治参拾九年拾月五日印刷  
 明治参拾九年拾月廿日發行

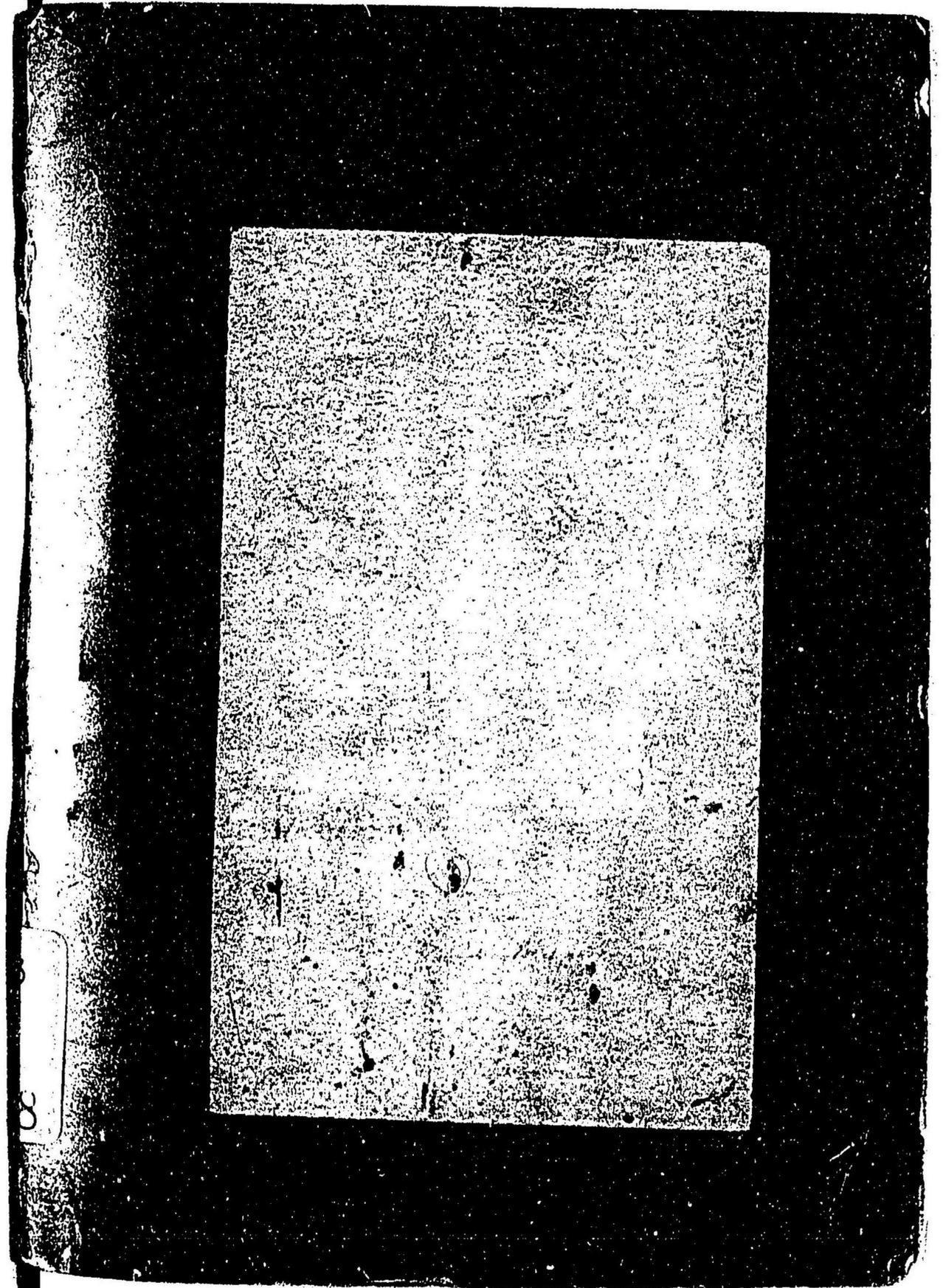
著者 安孫子美子  
 發行者 東京市淺草區福井町壹丁目壹番地 前田駒吉  
 印刷者 長野縣長野市新田町五拾壹番地 清水龜之助  
 印刷所 長野縣長野市新田町五拾壹番地 清水活版所  
 發行所 長野縣長野市元善町参拾九番地 金華堂書店  
 發行所 東京市淺草區福井町壹丁目壹番地 松陽堂  
 發行所 東京市神田區美土代町予目二番地 富田文陽堂

〔不許複製〕

定價參拾錢







8